と「止めてよ!赤ちゃん扱いしないでよ」

カミルは、今年で十二才になる。年の割には小柄で、よ く学年を間違えられていた。本人も気にかかるのか、努め て牛乳を飲んだり、鉄棒にぶら下がったりと余念がない。 ともあれ、本当に子供だった時代は終わろうとしていたのの 折しむ。

「あら、可愛くない。生意気ね」

手を洗い、ようやく席に着いたコリンナはスプーンをシ チューの海へ沈める。途端に彼女の鞄からバイブレーター のくぐもった音が響いた。コリンナは携帯端末を取り出す。 「おい、食事中だぞ」

不機嫌なダニエルの声にコリンナは掌をかざし、制止の 仕草で答えた。

「はい、バックハウスです。はい。……はい。でも、ええ。₩51

社用の連絡らしい。ダニエルは応対しているコリンナを

横目に陶器のボウルから小皿へサラダを盛った。 「わかりました。ええ、大丈夫です。……お父さん。私、

明日から出張だって一

通話を切断したコリンナが口を開く。

「ええ! じゃあ、学校はどうするの? 来てくれるって

ぐ 言ったじゃない!

カミルの言葉にコリンナは首を傾げていた。

「学校?」

・ 、、 『言言 ○ 呆 巻 音 が 学 核 〈 出 と 、 『明日は、『仕事の日』だよ! 忘れちゃったの?」ば 「学校?」

は『仕事の日』というのは、児童の保護者が学校へ出向き、 労働についてスピーチをする行事である。就労の重要性を

薫陶する目的で行われていた。

「まさか! 忘れるわけないでしょ。でも、ちょっとうっ 5 かりしてたかな? ……そうだ!」

手を打ち合わせたコリンナは、ダニエルを示す。

「おじいちゃんに行ってもらいましょう!」

「俺が?もう働いてないぞ」

ダニエルは面喰っていた。

「仕事の経験を話せばいいんだもの。今、働いているかど

うかは関係ないのよ。うん。そうしましょう。ねえ、これっ てすごく良い考えだと思わない?」

「……な母さん」

不満げな息子の金色の髪をコリンナは無でる。

「お願い、カミル。仕事なの。お母さんが働かなかったら

カミルだって困るでしょ?」

「そうかもしれないけど」

コリンナは鞄を探った。カミルの前に大のぬいぐるみが

差し出される。 「ほら、可愛いでしょ?」これをあげるから機嫌直して。 ◇ ……本当にごめんね。絶対埋め合わせをするわ。約束する」

カミルは、渋々、ぬいぐるみを受け取った。(つづく)

「元気だった? 私のカウボーイさん」 笑顔のコリンナがカミルの類にキスをする。 「お母さん。お帰りなさい」

に服していた。

ダニエル・バックハウスは、コックとして定年まで軍役 上品だぞ」

「何だと! 行儀の悪い不良娘が! 新兵のほうがずっと さんみたい」

「はしい。……お父さんたら、まるで親戚のうるさい小母 ダニエルにたしなめられ、コリンナは舌を出す。 「手を洗ってこい。子供の前で恥ずかしくないのか?」 に手を伸ばしていた。

コリンナは、テーブルの騒へ立ったままコーンブレッド クスーツ、ダスターコートに身を包んでいる。 ミルの母、コリンナ・バックハウスだ。白いブラウスにダー

ドアが勢いよく開き、痩せた赤毛の女が入ってくる。カ 「ただいまー・わー、美味しそう!」

にテーブルを囲み、夕食を半ば終えていた。

とである。カミル・バックハウスは、祖父と向かい合わせ アドベントカレンダーが破らればじめる一月ほど前のこ

ロ 手渡されるが。自律型ロボットと少年のハートフルSFコメディ》 は、なかなか背が伸びないことだ。ある日、母親からぬいぐるみを

ぼ(十二才のカミルは、母親と祖父とともに暮らしている。一番の悩みく

6

作品冒頭の紹介

ロボとぼく

 $\overrightarrow{\pi}$ 題 ₩ 2015年3月 ロボとぼく

作品冒頭の紹介

ίĪ (H 5 1 J=

twitter: @donut_no_ana tumblr:http://donut-st.tumblr.com.